

# A・MUSEUM

vol.53  
[2007.12.25]



ミュージアムパーク  
茨城県自然博物館



茨城県利根町の田んぼに渡来したコミミズク (撮影：中山正夫)

## ヨシ原や田んぼで見られるフクロウ ～コミミズク～

コミミズクは、日本各地の川原や草原などに渡ってくる冬鳥です。昼間は草むらの中でじっとしていることが多いのですが、夕方になると地上近くを飛び回って、ネズミなどの小動物を捕食します。フクロウ類では珍しく、林の中ではなく開けた場所で生活します。

頭上の耳のように見えるものは、<sup>うかく</sup>羽角とよばれる飾り羽です。本当の耳は、他のフクロウ類と同様に顔のすぐ後ろにあり、左右非対称の位置に耳の穴があります。耳の位置がずれていることで、音源の方向を立体的に捉えることができ、夜間の狩りを可能にしているのです。ちなみに、コミミズクを漢字で書くと「小耳木菟」と書きます。小さいミミズクではなく、羽角が小さいミミズクというのが名前の由来です。  
(教育課 伊藤 誠)



コミミズクの飛翔 (撮影：中山正夫)

特別展示

# 海を越えてきた植物たち

## —アートでみる帰化植物—

帰化植物とは、人間の活動によって外国から日本に持ち込まれ、日本で野生化した植物のことをいいます。私たちの周りには、セイヨウタンポポやセイタカアワダチソウなどたくさんの帰化植物が見られます。明治時代になり、外国との行き来が盛んになると、もともと日本には生育していなかった植物が、いろいろな機会をねらって侵入・定着し、分布を広げることになりました。現在、日本では1,500種を超える帰化植物が知られており、これは日本で見られる植物全体の20%を超える数字となっています。

今回の特別展示は、この帰化植物をボタニカルア



イチビ  
画：本田尚子  
渡来は江戸時代以前、  
インド原産

繊維植物として古くから栽培されたが、トウモロコシなど飼料作物に混入して広がりがつある。

物、牧草など目的をもって輸入し、栽培したものが逃げ出して野生化するというケースが圧倒的です。

帰化植物の多くは、空き地や畑、道ばたなど、人間が手を加えた場所によく生育し、森林や草原など自然のなかにはあまり侵入しません。しかし、ときには、アレチウリやホテイアオイなど、河川敷や湖沼で大増殖し、在来植物の生育を脅かすという問題を起こしています。

このような帰化植物にまつわる話題を、すばらしいボタニカルアートを鑑賞しながら考えてみたいと思います。  
(企画課 小幡和男)



セイヨウタンポポ  
画：丸山きみよ  
1904年確認、欧州原産

最もふつうに見られる帰化植物であるが、起源は野菜として持ち込まれたものといわれる。

トで紹介します。ボタニカルアートとは、植物を正確で精密に描いたもので、植物画ともよべれます。この展示は、202種の帰化植物を日本植物画倶楽部会員109名が制作したボタニカルアートで紹介するものです。当館では、2003年2月に「アートが植物を救う」展を開催し、絶滅危惧植物を日本植物画倶楽部会員制作によるボタニカルアートで紹介しました。今回の帰化植物画の制作は、日本植物画倶楽部により絶滅危惧植物画の制作に引き続き進められた企画事業です。

帰化植物侵入の原因は、輸入する穀物や羊毛などに紛れて入ってくることもあります。園芸植物、農作



カモガヤ  
画：飯野佳代  
江戸時代末期渡来、  
欧州～西アジア原産

明治初期、アメリカから移入され牧草として栽培された。

会 期 2008年2月2日(土)～2008年2月24日(日)

開館時間 午前9時30分～午後5時まで(入館は午後4時30分まで)

休 館 日 毎週月曜日  
※ただし、2月11日(月)は開館し、翌日が休館となります。

入 館 料 大 人 520円(420円)  
高校・大学生 320円(200円)  
小・中学生 100円(50円)

※( )内は20名以上の団体料金です。

※特別展示開催期間中は、通常時の入館料となります。

●記念講座「ボタニカルアートを描いてみよう」

講 師：本田尚子氏ほか

日本植物画倶楽部会員にご指導いただきます。

日 時：2008年2月3日(日) 10:00～16:00

定 員：先着60名

対 象：小学4年生以上

参加費：お一人様 300円(用紙代等)

※お申し込みは電話(0297-38-0927、9:30～17:00)にて  
お願いします。

※画材の植物、鉛筆(2BとHB)、水彩絵の具(できれば透明水彩絵の具)・面相筆(大小)は各自ご用意いただきます。

## 里山の管理

## 里山環境学習サポート事業

里山がもつ資源はかつて薪や炭、落ち葉の堆肥などに利用されてきました。しかし、現在残っている里山には管理が放棄され、荒れているところもあります。それは薪や炭が石油資源に、堆肥が化学肥料にとって代わられるなど、私たちの生活様式が大きく変わり、里山が生活と密接に関わらなくなってしまったことが大きな要因となっています。

管理されなくなった里山は、どうなってしまうのでしょうか。コナラやクヌギなどの落葉広葉樹林は、シラカシやスタジイなどの常緑広葉樹林になったり、アズマネザサが繁茂するようになっていたりします。今まで明るかった林床は暗くなり、カタクリやフクジュソウ、スミレ類などの多くの草本植物が生育できなくなります。もちろん、里山をすみかとしているカブトムシやノウサギ、タヌキなども少なくなっていくます。

里山を管理するための手入れ方法はいくつかありますが、その一つがクヌギやコナラなどの雑木林の伐採



コナラの萌芽

です。およそ20年ごとに木を伐採することで、薪や炭などの燃料とすることができます。伐採された切株からはすぐに新しい芽が出てきます。それがまた新しい雑木林を形成していきます。また、下草を刈り取り、落ち葉をかいて、堆肥をつくることができます。以上のような管理をす

ることで林床の環境が整い、草本植物の新しい芽生えがみられるようになります。

近年、里山の自然を見直し、保全していこうという動きがあります。里山は日本のふるさとの原風景です。景観を守るだけでなく、環境の保全、学校教育における活用などを目的として、さまざまな団体が里山を舞台に活動しています。里山の価値を見だし、管理するということは、私たちの身近な自然を育てていくことになるのです。（資料課 国府田誠一）

### 県内の里山で活動する団体を紹介します！

◆十一面山平地林保全整備促進協議会

発 足：平成 15 年 9 月 28 日

会員数：107 名（平成 19 年 4 月現在）

代表者：吉原光夫（常総市本石下）

所在地：常総市本石下（鬼怒川河畔の雑木林）

面 積：約 20ha

植 生：雑木林、アカマツ林など

主な活動：平成 15 年に、鬼怒川河畔に不法投棄されていた産業廃棄物撤去作業を行ったのをきっかけに会が発足しました。現在は、下草刈りや植林など雑木林の保護と整備を続けながら、十一面山のフィールドを舞台に、自然観察会や森林講習会など自然体験イベントを、近隣の小学生や保護者、ボーイスカウトなどの団体を対象に実施しています。



十一面山の自然観察会に集まったメンバー

## ネズミのおはなし

ネズミと人との関わりは古く、弥生時代の登呂遺跡からネズミ返しが発見されており、当時も既にネズミの被害に頭を悩ませていたものと思われる。ちなみに、ネズミの語源は「ねすみ（寝盗み）」から転じたとの説が有力です。ネズミとの戦いは現在でも続いています。一方、江戸時代の白ネズミや現在のハムスター（キヌゲネズミ科）ブームなどペット動物でもあります。更には医学等の発展に欠かすことができません。

アマミトゲネズミやケナガネズミなどは天然記念物に指定されています。

人との関係が深いため、古事記や今昔物語など、旧くより多くの書物でとりあげられており、ネズミが神様の使いとなって人間世界との関わりをもつ物語も多いようです。正月に信州では「ネズミの年取り」八丈では「よめご祝い」といってネズミに餅を供える風習が残っているようです。ネズミの別称は京都のヨメゴゼ、岩手のオヨメサマ、四国全県で

## コラム by director SUGAYA

のオフクサマ、福島のおキヤクサマなど多種多様ですが、茨城はチュウチュウひとつで全国的にみて極めて少ないようです。



イラスト：上原みどり（自然博物館友の会事務局）

## すばらしい化石たち

私は中生代の植物化石を研究しています。その中でも特にジュラ紀後期（約1億5000万年前）から白亜紀前期（約1億年前）の時代を中心として調査研究を行っています。この時代はちょうど被子植物が出現した時期ということもあり、植物の進化を考える上で興味深い時代です。被子植物は今日私たちの身の回りで見られる、きれいな花を咲かせる植物たちです。これらの植物が出現する前は、花が咲かないシダ植物や目立たない花を咲かせる裸子植物（ソテツ、イチヨウなど）の世界でした。当時の春先の景観は現在と違いどんなにか味気ないものだったのでしょうか。

さて、現在福島県北東部では常磐自動車道の工事が盛んに行われており、2005年にはその関係者らの協力でジュラ紀後期の植物化石が大量に採集できたことは以前この誌面でお知らせしました。その整理にはたいへんな時間がかかり、標本ひとつひとつをクリーニングナンバーを付ける作業が最近になってやっと終了しました。その数は約900点、地元の協力者らが自宅に保管している分を加えると1,000点以上になるでしょう。ひとつおりの標本を見て大まかに分類した状態ですが、これらの中にはたいへんすばらしい化石が多くあることがあらためてわかりました。

ここで言う「すばらしい化石」とは「きれい」とか「大きい」とはちょっと意味が違います。化石を研究する者にとって「すばらしい化石」とは、大切なポイントが見られる化石や保存状態が良い化石を言います。植物の場合の大切なポイントとは、仲間を増やすための種子や胞子などをつくる部分（繁殖器官）です。た



シダ植物化石のスケッチ

たとえば左下のスケッチにあるようなきれいなシダ植物の化石が大きな岩石一面に見られても、これだけではシダ植物のどのような仲間<sup>仲間</sup>に分類すべきか情報がないのです。ところが、写真（上）のように胞子が入っている袋（黒く見える粒）がついていると、それが決め手になって種類が判別できることが多いのです。今回得られた標本の中にはこのような「すばらしい化石」が多く見られます。報告書の作成にはまた膨大な時間がかかりますが、当時の植物についての貴重な情報を伝えられるよう努力していきたいと思っています。

（教育課 滝本秀夫）



今回得られたシダ植物化石（胞子が入った袋が黒い点になって見える）



今回得られたソテツ状の葉と花のような繁殖器官（矢印）の化石

## 月と人間

最近、月に関する話題が尽きません。日本の「かぐや」に続いて中国、2008年にはアメリカ、インドが月周回機を打ち上げる予定です。アポロ計画以来の月探査ラッシュが始まっています。

月の満ち欠けは、地球の自然界の生態リズムと連動していますが、月が見せる表情もまた、私たち人間と同じです。真っ暗な新月もあれば、光り輝く満月の時もあります。これは、人生には成功もあれば挫折もあ

るということを暗示しているようです。

以前、地平線から昇る満月を見たことがあります。赤く大きな月は、いつもの静かな表情とは違って引き込まれそうなくらい神秘的でした。

博物館の第1展示室「進化する宇宙」では月や太陽系のさまざまな惑星の構造について知ることが出来ます。皆さんも何か新しい発見ができるかもしれません。

（ミュージアムコンパニオン 松田咲耶子）

## 小さな発見—ミュージアムコンパニオン—



## 植物たちが語る茨城の自然

## 第1期総合調査から

茨城県の自然の全体像を明らかにするため、当館開館の1994年にスタートした総合調査は、12年間をかけ県内を一巡し、2005年度に第1期が終了しました。植物分野については、維管束植物（種子植物とシダ植物）だけでなく、コケ植物、地衣類、海藻類、菌類、さらに水中にただようプランクトンの藻類まで、多岐にわたる調査が実施されました。ここでは、その成果の一端を紹介します。

### 〔植物にとって大切な筑波山〕

県内の維管束植物については、12年間の調査で亜種・変種を含めて約2,100種の生育が確認されましたが、筑波山だけで、実にその約4割の820種を数えることができました。筑波山は、山ろくにスタジアム林、中腹にモミ林やアカガシ林、山頂付近にブナ林があるなど、山ろくから山頂にかけて多様な自然林が存在する貴重な所です。過去にここで発見されたツクバトリカブトやホシザキユキノシタなどは、筑波山が数少ない県内での生育地になっています。特に筑波山のブナ林は低山にある貴重なものであり、その保全への取り組みが始まっています。

### 〔目立ちませんが一所懸命命んでいます〕

コケ植物や地衣類は、足下や樹皮上に生育する地味な植物で、今回が全県を対象としたはじめての調査となりました。その結果、コケ植物は361種が確認され、この中には、北茨城市の電谷地で確認されたオオミズゴケや日立市の泉が森公園で確認されたカワゴケのように、環境省のレッドデータブックに掲載されているものが12種類含まれています。一方、地衣類は189種を確認することができました。筑波山は岩場も多く地衣類の宝庫ですが、登山道脇に生えるイワタケやトゲシバリの生育状況の悪化も報告されています。過去に筑波山で発見、命名されたカバイロイワモジゴケなど、



ホシザキユキノシタ



イワタケ (撮影：中島明男)

今回の総合調査では確認できなかった種もありました。小さく目立たない存在ですが、環境の変化を私たちにうたえているようです。

### 〔まだまだ続く総合調査〕

総合調査は、2006年より第2期がスタートしました。登山者の増えている筑波山、水質改善のための取り組みがなされている霞ヶ浦、開発が進む平地林・海岸など、その変化を把握し、そしてその環境を保全していくために、総合調査はますます重要になっています。

(資料課 栗栖宣博)



コケ植物と地衣類の調査

## 淡水から海水へ

当館の海の水槽には、口が“へ”の字に曲がったような特徴のある顔をした、サクラマスという魚がいます。一生を淡水域で過ごす個体をヤマメ、ヤマメが海に降りた個体をサクラマスと呼びます。

この魚は通常、孵化してから約1年半後には海に降ります。その時、パーマークと呼ばれる模様が消え、体の色は銀色に輝いてきます。このことを銀毛(スモルト化)といい、淡水から海水で生活できる準備が整

った印になります。

上流水槽のヤマメの一部にも、この状態が見られたため、予備の水槽で徐々に海水に慣らしてから、海の水槽に移しました。初めは他の魚や水槽内の様子を見ていたものの、慣れてくるとなわばり意識が強いため、ほかの魚が近寄ると追い払う仕草を見かけるようになりました。今では、すっかり海の水槽の顔となり、水槽を悠々と泳ぐ姿がご覧いただけます。(水系担当 廣瀬南帆)

## おさかな通信



サクラマス

## ピンゴケモドキ

茨城県の自然の全体像を明らかにするために実施している総合調査の成果の一つとして、八溝山の旧鳥居に生える貴重な地衣類標本が収蔵されました。この標本は、地衣類の中でも非常に小さく、極小のピンのように見える「ピンゴケモドキ」という種です。地衣類は、菌類と藻類が絡み合って共生したもので、代表的なものに、ウメの古木などによく着くウメノキゴケがあります。しかし、地衣類をよく知る人が少ないためなのか、景観維持のために着生基物から安易に剥ぎ取られたり、開発により着生基物ごと撤去されたりする



ピンゴケモドキ

場合がよくあります。

ピンゴケモドキは、ルーペで見ないとその存在がよく分からないこともあり、この標本の収蔵までに、こんなエピソードがありました。総合調査の調査員である中島明男氏は、八溝山を調べたときに、ピンゴケモドキが登山口の鳥居の柱一面に着いているのを確認しました。そのとき、標本は採集したのですが、満足のいく写真が撮れなかったため、数日後に再び登山口を訪ねました。ところが、まるで狐につままれたかのように、忽然と鳥居が消えていました。愕然としながらも辺りをよく探すと、改修のため撤去された鳥居が、大きな穴の中に切り倒されていたそうです。そこで、作業をしていた方に、その鳥居に貴重なものが着いていることを話し、埋められてしまう予定だった鳥居を引き上げ、短く切断してもらったそうです。そのため、ピンゴケモドキが着いている鳥居の柱の標本は、撤去作業でついたと思われる傷跡があります。

さて、第41回企画展では、このピンゴケモドキを展示しています。紹介したエピソードを心に留めて見ていただくことで、少しでも地衣類に親しみをもっていただければと思います。（教育課 湯原 徹）

## しぶんぎ座流星群

寒さが厳しい季節となりましたが、空の透明度は上がり、星々がスッキリ見える時期となりました。夜空を見上げてみると、時々スッと動く光を目にします。流星です。普段は1時間に2、3個しか現れません。なかなか見られない現象ですから、見られたときに「幸せ」と感じる人がいるのもうなずけます。

さて、ここでは「しぶんぎ座流星群」を紹介します。流星群とは、流星が一定の期間にたくさん流れる現象です。流星は宇宙空間を漂うチリが大気圏に飛び込んで起こる現象です。彗星の軌道上にはたくさんのチリがあり、地球と彗星の軌道が交差するときにたくさんの流星を出現させるのです。流星が一番多く流れる日を極大日といい、同じ流星群の流星はある点を中心に放射状に

流れる性質があります。

表に主な流星群をあげました。月齢の15が満月を表し、15から離れるにしたがって月が細くなりますので、月齢のことも考えて観察するとよいでしょう。

1月にある「しぶんぎ座流星群」は極大時に1時間あたり50個もの流星を出現させます。このしぶんぎ座流星群は他の流星群と比べると出現期間が短く（1/1～1/5頃）、ピークの時間も2時間程度と短いですが、その時間にうまく当たれば澄んだ空に流れる流星にウットリさせられることでしょう。2008年は1月4日の明け方と宵の空にご注目ください。

（教育課 木村正和）

流星群名	活動期間	極大日	数	月齢
しぶんぎ座流星群	1/1～1/5	1/4	50	25
こと座流星群	4/16～4/25	4/22	10	6
みずがめ座流星群	4/19～5/28	5/6	10	1
ペルセウス流星群	7/17～8/24	8/13	50	11
ジャコビニ流星群	10/6～10/10	10/8	5	9
オリオン座流星群	10/2～11/7	10/21	10	22
しし座流星群	11/10～11/23	11/18	10	19
ふたご座流星群	12/7～12/17	12/14	50	16

2008年の主な流星群の活動予報



写真中央から放射状に飛び出すしし座流星群（2001年11月18～19日）

## トピックス

### ○ジュニア学芸員の調査活動

博物館に興味関心のある中高生が集うジュニア学芸員のメンバーは、各自の研究テーマを決め、博物館職員の支援のもといくつかの調査活動を行っています。今年度は、茨城県内の水生昆虫調査、菅生沼の魚類調査、大子町の北田気層と浅川層の化石調査に、夏休みなどを利用して取り組み、3月の発表会に向けて着々と準備を進めています。

下の写真は、茨城県桜川市の<sup>たなだ</sup>棚田で水生昆虫調査を行っているところです。以前にタガメの生息報告があったところを文献で調べ、下見で調査地点を絞り込み、棚田やその周辺の用水路、ため池を重点的に調査しました。この調査では、ミズカマキリやシマゲンゴロウ、タイコウチ、ヘビトンボの幼虫（マゴタロウムシ）などをたくさん採集できましたが、目的のタガメを確認することはできませんでした。タガメが生息するには厳しい環境になっていたのかもしれない。タガメが生息できる環境を考察しなおし、来年こそはジュニア学芸員の手で<sup>まぼろし</sup>幻のタガメを見つけてほしいと考えています。（教育課 伊藤 誠）



茨城県桜川市での水生昆虫調査

### ○大きく広がったスクールミュージアム

学校の一角に動植物や化石といった標本や図鑑等を設置してつくられたミニ博物館をスクールミュージアムと称し、平成17年度から始まった活動も今年度で3年目を迎えました。これまで活動してきた5校は対象の地域を県南と県西に絞ったものでしたが、今年から対象地域を全県に拡大し、県北、水戸、鹿行の3地区から各1校（日立市立会瀬小学校、東海村立村松小学校、行方市立麻生小学校）を加えた合計8校で展開されるようになりました。新しく加わった学校では、1学期に、それぞれの学校においてスクールミュージアムの設置式が行われ、同時に博物館から動植物の標本や図鑑などが貸与されました。

そして夏休みには博物館を会場にして、動物と植物の標本作製講座が2日間に分けて行われました。100名を超える児童や先生、サポーターの方々の参加があ



植物のさく葉標本づくり（麻生小学校）

りました。今後はそれぞれの学校で、地域の特色などを出した独自の博物館（スクールミュージアム）をつくっていってくれることでしょう。

（教育課 木村正和）

### ○いばらきの自然を再発見しました！

第41回企画展「ミヤマスカシユリの<sup>かお</sup>薫る里」の記念イベントとして「いばらきの自然再発見 トークセッション」を10月20日に開催しました。

スピーカーは、ヒヌマイトンボ発見者の廣瀬 誠氏。NPOの活動などにも積極的に参加しているイラストレーター秋山昌範氏。NHK水戸放送局の看板キャスター神原千恵氏。この3人の方々に、それぞれ異なる立場で茨城の自然の素晴らしさを紹介いただきました。

参加者からは、「それぞれ違う立場の人たちからの話が聞けて、とても興味深かった。私たちも自然に親しみ、観察してみたいと思った。」「3人の人となり自然とのかわりが自然ににじみ出ているよい話であった。」「いろいろな視点から茨城の自然をとらえることができ、おもしろかった。」などの感想がありました。それぞれ違う立場からの茨城の自然についてのアプローチは、3名のスピーカーの個性が出ていて興味深いものでした。今回のイベントで参加者の方々には市民の目から見た茨城の自然を、再発見していただけたことでしょう。（資料課 湯本勝洋）



切り絵を披露する秋山氏（中央）

## かはくコラボ・ミュージアムinいばらき



自然発見工房で行われたイベント「植物を使った遊び」で講師をつとめる国立科学博物館の矢野亮氏



カラスウリのちょうちん



木の実の人形

国立科学博物館との連携事業「かはくコラボ・ミュージアムinいばらき」として「この実、何の実、きになる実 タネで楽しむ秋の植物」をテーマに、ミニ企画展「タネはふしぎだね」展やその関連イベントが、11月から約1カ月間、当館の自然発見工房を中心に開催しました。

タネに関する企画展は1年前に実施したばかりですが、今回は当館の特徴である野外施設を最大限に生かそうと考え、展示は野外で見られるタネを中心に展示しました。また、実際にタネがついている様子やその植物も観察してもらえるように、タネがどこで見られるかわかるような地図も用意してみました。ふだん何気なく歩いてしまう野外施設も、タネを探して歩くと新しい発見があると好評でした。

また、今回は国立科学博物館の職員や同館の教育ボ

ランティアの協力も得て、「植物を使った遊び」などのイベントも同時に開催しました。当館でもさまざまな植物を題材にした子ども向けのイベントを実施していますが、「カラスウリのちょうちんづくり」や「木の実の人形づくり」など、当館では実施したことがないものも多く、子どもたちも喜んで活動していました。

新しい活動を考えるのにもいつも苦労している博物館スタッフですが、今回、職員と交流したり、新しい活動を体験したりすることができ、とてもよい刺激になりました。  
(資料課 栗栖宣博)

### 編集後記

猛暑が続いた夏の余韻なのか、暑い日が続いて今年はなかなか秋の気配がしてこないと心配していました。でも、毎年菅生沼で越冬するコハクチョウが10月18日に飛来を確認できてひと安心と思っていたら一気に冬に突入したような寒さがやってきました。みなさま風邪など召さぬように。(I.K)

### 【交通案内】



- 常磐自動車道谷和原ICから20分
- つくばエクスプレス守谷駅下車  
～関東鉄道バス「若井行き」又は「猿島行き」乗車  
～「自然博物館入口」下車、徒歩5分
- JR柏駅で東武野田線乗り換え、愛宕駅下車～茨城急行バス「若井車庫行き」乗車～「自然博物館入口」下車、徒歩10分



### 【開館時間】

午前9時30分から  
午後5時まで  
(入館は4時30分まで)  
※ペット及び遊具等のお持ち込みはご遠慮ください。

### 【入館料】

区分	本館・野外施設		野外施設のみ	年間パスポート
	企画展開催時	通常時		
大人	720円 (580円)	520円 (420円)	200円 (100円)	1,500円
高校・大学生	440円 (300円)	320円 (200円)	100円 (50円)	1,000円
小・中学生	140円 (70円)	100円 (50円)	50円 (30円)	300円

(注)：( )内は団体料金(20名以上)  
未就学児・昭和13年4月1日以前に生まれた方・障害者手帳をお持ちの方は入館無料です。

次の日の入館料は無料です。

- 5月4日(みどりの日) ●6月5日(環境の日)
- 11月13日(茨城県民の日) ●3月20日(春分の日)
- 高校生以下の児童・生徒は毎週土曜日  
(ただし、春・夏・冬休み期間中を除きます。)

### 【休館日】

- 毎週月曜日
- ※1月14日(月)、2月11日(月)は開館し、翌日が休館となります。

## 自然博物館ニュース A・MUSEUM(ア・ミュージアム)

A-MUSEUM (AMUSEMENT+MUSEUM)

企画・編集：ミュージアムパーク茨城県自然博物館企画課/発行2007年12月25日  
〒306-0622 茨城県坂東市大崎700番地 TEL.0297-38-2000 FAX.0297-38-1999  
URL <http://www.nat.pref.ibaraki.jp/>  
E-mail [webmaster@nat.pref.ibaraki.jp](mailto:webmaster@nat.pref.ibaraki.jp)  
メールマガジンも配信中。登録はホームページから

ミュージアムパーク茨城県自然博物館は、誰もが親しみ、誰もが楽しめるア・ミュージアム(アミューズメント+ミュージアム)をめざしています。